

チャイナタウン : 民族と文化の架け橋 : 歴史みちくさエッセイ

著者	陳 天璽
ページ	298-302
発行年	2009-05-25
URL	http://hdl.handle.net/10502/4806

史
みちくさ
エッセイ

チャイナタウン 民族と文化の架け橋

陳 天 璽

国立民族学博物館准教授

海水の到るところ華僑あり

中国語で「四海^{スハイ}都有^{ヨウ}中国人^{チンゴレン}」という言葉があります。同じような比喩で日本では「海水の到るところ華僑あり」と古くから言われてきました。旅行に出かけた際、意図もせずチャイナタウンに出くわしたり、不慣れな外国の食事に飽きてきたときに現地中華料理店に厄介になったという経験を持つ人も少なくないでしょう。

私は、世界各地に移住した華僑華人を研究対象としているので、旅に出かけた際は必ずといってよいほどチャイナタウンを訪れます。しかも、横浜中華街に生まれ育ったので、海外のチャイナタウンを訪れているにもかかわらず、建物や看板、話し声、食べ物など町の雰囲気が大同小異なので異郷にいるということを忘れてしまうことも少なくありません。

欧米人と日本人の「ハブ」だった華僑華人

公私問わず、どっぷりチャイナタウンに漬かっている私ですが、恥ずかしいことに大学の卒業論文で華僑華人をテーマとするまで、「なぜ横浜にチャイナタウンがあるのか」、「なぜ世界

に華僑華人が移住したのか」を知らずにいました。中学・高校時代、「歴史の授業は暗記ばかりでつまらない」と間違った認識を持っていたのがあだとなっていました。

横浜中華街の歴史を勉強し、目から鱗が落ちる思いをしたのを覚えています。いまから一五〇年前の一八五九年、日米通商条約を締結し横浜が開港されると、多くの欧米人が来日し、それをきっかけに日本は急速に近代化しました。欧米人は日本人と直接意思疎通できなかったため、筆談で交流することができず中国人を通訳・仲介者として同行させました。日本は開国しましたが、文化や習慣が違う欧米人には居留地を設け、日本人が生活する内地と区画しました。条約国でなかった清国の国民は本来ならば日本に入ることではできなかったのですが、必要不可欠な存在だったので、港の近くに雑居地を設け彼らが生活することを認めました。その雑居地が今の横浜中華街の原形となったのです。

こうした歴史を学び、いま自分が華僑華人の一人として横浜で生活しているのは、歴史と綿々とつながっているのだと知りました。あらためて私たちが歴史に生かされていること、歴史をつくっていることを自覚し、歴史がもつ奥深さ親密さに気づかされました。

世界に散らばった華僑華人たち

チャイナタウンで生活している華僑華人をひも解いてみてゆくと、本巻で触れられている中国の近代史と深いかわりがあることがわかります。長い歴史を持つ中国にとって、近代は幾

多の災難を経験した時代であるといえます。多くの人が故郷を離れ華僑華人となったのも、国内での生活が厳しかったことに起因しています。

華僑華人とは、中国大陸・台湾・香港以外に居住している中国系の人々を指しています。華僑の「僑」には仮住まいという意味があり、中国国籍を保持したまま海外に暮らしている人々を指します。一方、華人とは、すでに外国国籍を取得し法的には中国人でない人を指します。中国文化を保持し中国の血統を有する人々の総称として使われることもあります。

海外に移住した中国人を華僑華人と呼ぶようになったのは、中国人が大量に海外へ移住するようになった一九世紀後半のことです。清朝は臣民の海外移住を禁じていましたが、アヘン戦争を機にこれを容認せざるを得なくなり、中国人の海外移住が本格化しました。海外へ渡る人が多かった要因には、中国国内における政治的混乱、経済的困窮のほか、海上交通技術が発展していたこともきっかけの一つでした。一方、欧米では奴隷制を廃止したことや植民地開拓のため、良質で安価な労働力の需要が高まり、そのターゲットとなったのが中国人だったのです。船にすし詰めとなった中国人たちは、新天地を求めアメリカや東南アジアに赴きました。数年働いた後、故郷に戻る人もいましたが、多くはそのまま移住先に根付きました。それ以来、華僑華人は世界に散在するようになり、その数は三〇〇〇万人を越えるといわれています。

海外移住の手段が主に船であった時代、華僑華人は地理的に海に出やすい福建や広東など沿

海部出身の人々が主でした。一方、移住先においてチャイナタウンが形成されるところも、彼らを上陸する拠点である港湾都市に多く見られます。

「華僑は革命の母」、チャイナタウンはネットワークの拠点

華僑華人にとつて言葉や気候などが違う異郷の地での生活は不便でした。新しい土地に慣れるため人一倍努力をせねばならず、また故郷に残した家族を思う寂しさにも耐えねばなりません。よそ者として差別に遭うこともあります。こうした環境のなか、同じ境遇にある者、同じ方言を話す者が互いに親近感を持つことは当然のことでしょう。彼らが集まる場所は中国語が飛び交い、彼らの生活に必要なものや情報が集中しました。そして、血縁団体、地縁団体など中国社会に倣った互助組織が形成されました。こうして華僑華人が集住する街はチャイナタウンと呼ばれるようになったのです。

チャイナタウンには人や金そして情報が集まるため、ネットワークの拠点となりました。孫文が、清朝を打倒し共和国樹立を掲げ世界各地で革命運動をしていたころ、チャイナタウンは重要な拠点でした。また孫文が「華僑は革命の母」と称えたように、各地の華僑華人は資金面でも人力の面でも援助を惜しまなかったそうです。度重なる失敗に耐え最終的には辛亥革命でも成功させ、中華民国の国父と称された孫文は、実はハワイ育ちの華僑でした。海外に身を置き、さまざまな経験を積んだ移民という立場が、民主的な思想や偏狭的でない愛国心を抱かせる糧

となつたように思います。

マイノリティをどう生きるか、どう生かすか

愛国心はときに人々を苦しめます。華僑華人は、祖国を離れても中国の政治に翻弄ほんろうされ続けてきました。国民党と共産党によるイデオロギーの対立は華僑華人にも波及し、世界各地のコミュニティ内の闘争へと発展しました。横浜に華僑総会や華僑学校がいまでも二つずつあるのはこうした歴史が背景にあります。移民である華僑華人は、居住国においても祖国においてもマイノリティとして扱われ、はざまに立つ経験を余儀なくされてきました。政治や権力の周縁に追いやられた華僑華人が商売や教育に熱心なのは、マイノリティである自分や家族を守るため、それが最善の方法だと心得たからなのでしょう。世代を重ね、日常的に複数の言語や文化、そして社会に精通し易い立場を生かしグローバルな舞台で活躍する華僑華人も増えています。

一見、チャイナタウンや華僑華人は、中国の文化や民族で強固に結ばれたつながりを持つように見えますが、それでは表面的な理解に終わってしまうでしょう。移民であるが故に、自らの中に異なる文化を内包し、異なるものをつなぐ特性を持っています。そんな「ハブ」としての特性を生かし国々や民族の架け橋となる役割を華僑華人やチャイナタウンから引き出すことができます。グローバル時代に見合った歴史を、私たちは新たに編み出すことができるのではないかと思います。